彼の日常

森野カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼の日常

【Ｎコード】
Ｎ４２０９ＢＡ

【作者名】
森野カエル

【あらすじ】
彼の行為に堪えきれなかった。私の気持ちを伝え、今度こそ彼と・・・。（自サイトより）

「ちょっとそこに座って頂けますか？」

私はテーブルの向こう側に彼を座らせた。

「何？」

彼はいきなりの事にきょとんとしている。
首を傾げ、こちらを見つめてきた。
可愛い動きに私は一瞬ほわんとなごむ。
はっ、いけないいけない、今日こそはちゃんと話すんだから。
彼のこの可愛い容姿に、いつも私は怒る気力を奪われてきた。
頭を振りつつ、自分も座る。

「携帯電話をここに出して下さい」

テーブルの上をトントンと叩く。

「何々？何で変な喋り方してるの？」

「いいから出して下さい」

きっと彼を睨み付ける。

「何だか恐いよ？」

悲しそうな顔をしながら、彼は携帯電話をテーブルの上に出した。
とても心が痛い。

でも、負けていられない。

「携帯電話を開いて下さい」

彼は携帯電話を開く。

「待ち受けに設定されているのは何ですか？」

携帯電話を私はちらりと見る。

彼の方に開いているので画面は見えないが、そこに何が設定されているかは見なくても分かる。

「兄ちゃんの写真」

「そう！あなたのお兄さんの写真！」

ここで全国の彼氏持ちの彼女さんは何故？とお思いでしょう。

私だって最初に見た時には驚いたよ！

何故兄？

皆で撮った家族写真でもなく、何故兄オンリー？

「それがどうしたの？」

待ち受けに兄の写真が設定されているのは当たり前でしょ、みたいな顔をするな！

「おかしいでしょ！お兄さんの写真が待ち受けって！」

「おかしくないよ。兄ちゃんはかっこいいんだから」

そして始まる兄語り。
どこどこが良くて、どんなに素晴らしくて、この前はこんな事があって、その前はそんな事があって……。
「だから、僕もかっこいい兄ちゃんみたいになれるように、待ち受け見ながら頑張っているんだ」
目をキラキラさせながら語るあなたはとても痛いです。
自分の携帯電話を取り出し、私は彼の前に開く。
「私の待ち受けはあなたとのツーショットなんですが」
これで何かを感じてくれ。
「あ、これ初めてのデートの時のだ」
もしいつのか分からなかったら、私は泣いていたかもしれない。
「懐かしいねえ。僕、初めてのデートだったからどこに行けばいいか分からなくて、兄ちゃんに聞いて決めたんだよね」
ああ、だからゲームセンターとか、らしくない所に案内されたのか。
「で？」
「でも、僕がダメだったから上手にリード出来なくて」
「そうじゃなくて」
彼の思い出話を遮る。

聞きたいのはそれじゃない。

「私の待ち受けはデートの時の写真。あなたの待ち受けはお兄さんの写真。どう思いますか？」

彼は首を傾げる。本気で分からないようだ。

彼と私の携帯電話を操作し、フォトのフォルダを開く。

「じゃあこれなら？」

彼の前に二つの携帯電話を置く。

私のフォルダの中身は、動物や友達の写真が何枚かあるが、ほとんどが彼との写真だった。

それに対して、彼のフォルダはお兄さんの写真一色だった。

「楽しそう？」

「違う！」

そんな事は聞いてない。

「おかしいと思わないの？お兄さんばっかり写していて！」

彼が私の目を見る。

「何で？写真って撮りたいものを撮る物でしょ？」

そこに私は含まれないの？とはさすがに悲しすぎて言葉に出来なかった。

「この前のデートもお兄さん優先させたよね」
お兄さんが買い物に誘ってくれたとかで、前日にデートをキャンセルされた。
「それはちゃんと謝ったじゃない」
謝られたからと納得出来るものじゃない。
「別の日にデートもしたし」
デートをすれば良いってものでもない。
「そのデートも、お兄さんが遊びに行かずに家にいるからって早めに帰ったよね」
これが今日の話し合いをしようと思った原因となった。
「だって、あまりお兄ちゃんと一緒にいられないからなるべく一緒にいたいんだもん」
彼はぷうっと頬を膨らませる。
潰してやりたい。
その頬を潰してやりたい。
「私の方が一緒にいられないよね？」
彼の兄は一人暮らししているわけではない。
髪を染めたりピアス開けたりと、まじめとは言い難い性格をしているが、夜遊びをして家にあまりいないわけでもない。

しかも、彼は部屋もお兄さんと同じだから、家にいればほとんどべったりと一緒にいるのだ。

「そんな事ないよ。お兄ちゃんとは朝と家に帰ってからだけだから……」

彼が指を曲げて何かを数えている。

「ほら！8時間しかないんだよ！」

私に向けて折った指を彼は見せた。

「2時間も少ないんだから！」

一瞬、私の思考が停止した。

何てくだらない。

しかも、これって私の時間は授業中もカウントされていますよね？

なのに、お兄さんとの時間は睡眠時間がしっかり除外されていますよね？

イライラがつのり、思考がまとまらない。

さて、何て言い返してやろうか……。

その時、部屋の中で電子音が鳴った。

彼と私の目がテーブルの上に向く。

この音は私の携帯電話じゃない。

彼の物だ。

しかも聞き覚えがある。

彼が嬉々として携帯電話を取った。

「もしもし！お兄ちゃん？」

心なしか声のトーンが上がっている。

「うん、うん……。わかった！すぐ帰る！」

彼はすぐに荷物をまとめ始める。

「え、ちょ、ま」

「じゃあ、また明日！」

止める間もなく彼は出て行ってしまった。
こういうのが嫌で話し合いをしようと思ったのに、何も解決せずに終わってしまった。
これじゃあいつも通りのパターンじゃないか。
理性の限界だった。

「……この、ブラコンがあぁぁぁぁっ！」

私の叫び声がむなしく響いた。

ｅｎｄ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4209ba/

彼の日常

2012年1月11日02時49分発行